求菩提山開山伝説1500年記念特別展

縁起と開山 ～彦山六峰の山々～

2026.10.24（土）～11.29（日）

ごあいさつ

求菩提山に伝わる『求菩提山縁起』によれば、その開山は猛覚魔卜仙なる物により西暦526年（継体天皇20）になされたとされます。こうした縁起に記される開山時期は往々にして伝承の域を出ないものではありますが、歴史の一端を示すものでもあります。一方で考古学的な調査も一定の成果を上げており、山の歴史を解明する重要な情報を提供してくれます。

こうしたこれまでの研究の成果を踏まえ、求菩提山の開山伝承1500年にあたり、豊前修験道を構成する彦山六峰の山々の資料を通じて、その開山の歴史をひも解きたいと思います。

2026年　秋　　求菩提資料館

英彦山（彦山）

南岳（1199m）、中岳（1188m）、北岳（1195m）の三峰からなる豊前修験道の中心で、彦山流記（1214年：建保元）による開山伝説（北魏の僧：善正　継体天皇25年：531年）が伝えられます。そこには天忍骨尊の来臨と「日子山」の称号、寿元による熊野権現の勧請、藤原恒雄の伝承などが語られます。



奉幣殿

その後、法蓮による彦山の名称と霊仙寺への改称（819年：弘仁10）、さらに辛島氏（渡来系）と宇佐神宮、弥勒寺初代別当となった法蓮と八幡神との関係など豊前修験道の成立と宇佐八幡の関係は興味が尽きません。

中世には阿吸坊即傳による彦山修験の儀礼、組織の整備（彦山流修験道儀軌：1509～1558）が行われ、49窟が成立し、800余りの坊家が整備され出羽三山、大峰山と並ぶ日本三大修験と称されるようになります。しかし、戦国時代には大友氏による焼き討ち、秀吉による寺領没収などで彦山はで衰退してゆきます。



銅の鳥居

近世になると細川、小笠原による庇護と檀家制度の導入（42万戸）、修験道法度（1613年：慶長18）と本末論争による天台宗別格本山の称号得ることとなり、零元法皇の院宣により「英彦山」と改められます。

幕末には尊王攘夷運動とこれに伴う小倉藩による英彦山の占拠（1863年：文久3）、さらに神仏判然令（1868年：明治元）による廃仏毀釈運動は英彦山に壊滅的な打撃を与えました。

現在は英彦山神宮と高住神社、玉屋神社、大南神社などに、かつての豊前修験道の面影を見ることができます。

松尾山

標高475mの山で地元では「まつのさん」「まつのおさん」などと呼ばれます。旧記によれば能行（法蓮の高弟）が白山神より宝珠を賜り開山したと伝えられ、中世以降は野仲氏の祈願所として、近世には黒田、細川、小笠原の祈願所として隆盛を極めたといいます。

かつては求菩提六峰の1つとして「東方薬師瑠璃光浄土」そして医王寺には薬師如来が祀られました。元禄以降は英彦山六峰として36坊を抱えていたといい、末寺として正平寺、長福寺、吉祥時など十三ヶ寺を数えました。

山内には護摩壇（1805年：文化2）残され、板笈、薬師如来などの修験用具が伝えられます。また、今も保存会によってお田植え祭が伝承されています。



護摩壇



松会（上宮から神輿のおくだり）

蔵持山

みやこ町犀川上高屋にある478mの山で、神功皇后の朝鮮出兵に際し戦勝祈願をしたという伝承と、鞍を奉納した故事から「鞍用山」と呼ばれるようになったと伝えられます。

静暹による堂舎の建立（推古朝：593～628年）と蔵持三所権現の顕現、蔵持山への改称が伝えられます。「彦山流記」には彦山49窟の第2窟として開山が記され、宇都宮氏そして歴代藩主による庇護、英彦山六峰として宝船寺を中心に96坊を擁したといいます。

山頂には稚児落としと呼ばれる岩場があり、上宮社殿が鎮座しています。また二の鳥居付近に大講堂の跡地があり、その下には東谷、中谷、北谷という坊中が存在し石垣などの痕跡を見ることができます。さらに発掘調査によって11～12世紀の遺構が発見され、当時の様子を知ることができます。また、金銅十一面観音菩薩懸仏（1436年：永享8）、銅製鰐口（1149年：宝徳元）、獅子頭（1728年：享保13）など、当時を忍ぶ資料も伝えられています。



蔵持山全景



蔵持山神社（かつての大講堂）

等覚寺

普智山縁起によれば寺は慧空（東大寺僧）により734年（天平6）に開創されますがその後消失（810年：弘仁年間の頃）、まもなく涅槃上人により再建（830年：天長7）されたと伝えられます。さらに谷之坊覚心により修験道が移入され（953年：天暦7）、松会や鬼会を始めたとされます。1375~79年頃（永和年間）には堯賢によって300坊を擁する一大修験道場に発展したとされます。しかし応永年間（1394~1428）の戦乱に際し多くの修験者が戦死し、壊滅的な状況に陥ります。

近世には細川忠興による等覚寺の再興、小笠原氏による庇護により本谷16坊、北谷25坊が等覚寺を支え、求菩提山の傘下の山として存続します。

明治以降は白山多賀神社（上宮）と青龍窟（奥の院）を拠点とし、「松会」行事で唯一伝承される「幣切神事」は国の重要無形民俗文化財として往時の豊前修験道の儀礼を今に伝えています。



幣切神事の松柱

桧原山

正平寺は、桧原山（734.9m）の中腹（600m）にあり、はじめ正覚による長福寺（犬ヶ岳）の建立（578年：崇徳天皇元）がなされ、後に現在の地に正平寺が開創（752年：天平勝宝4）されたといいます。一方で雷現による開基（『扶桑記勝（ふそうきしょう）』1702年：貝原益軒）や、松尾山東ノ坊南覚の建立（1575年：天正4）とする記述（中野旧記）なども見られます。

さて、扶桑記勝には「此の山の人昔より疱瘡疫病を病まず」と記され、その「験力」を示す記述も見られるが、後に太宰管内志の中で伊藤常足は「近来はしからずと云」と付け加えていて、山の力が衰えていたことが見て取れます。また、松尾山旧記集には桧原山は松尾山とともに峰入りを行っていたことが知られ、彦山の承諾が必要としながら松尾山を胎蔵界、桧原山を金剛界としてその影響下に峰入り修行を行っていたことがわかります。



桧原山上宮

春峰（胎蔵界）は松尾山から桧原山へ、秋峰（金剛界）はその逆としていましたが、峰入りの断絶（1755~1773）により松会の神役を担うことができる山伏が不在となり、山はさらに衰えてゆくことになります。近世には経済基盤として檀家からの収入がその中心ではなく、勧化による臨時的収入に依る場合もあったといいます。こうして山は次第に衰えますが、今に伝わるお田植行事は神仏習合を良く体現した宗教儀礼として受け継がれています。



長福寺

福智山

標高 901m の山で、彦山の秋峰の行場として672 年（白鳳元）教順が開山したとされます。最盛期には 36 の坊があったといいますが、今は山頂には二つの祠があり小笠原藩が祀った「福智神社」、黒田藩の「福智社」が今も登山者を迎えます。

福智山の山麓には 1335 年（建久 2）に造られたとされる「方城岩屋磨崖梵字曼荼羅」があり、岸壁には不動明王、阿弥陀如来、大日如来、普賢菩薩を意味する 4 文字の梵字が刻まれています。彦山修験の秋峰との関係は明らかではありませんが、貴重な資料といえます。



福智山上宮

求菩提山

求菩提山の開山は求菩提山縁起（祐官坊祐舜 1727 年：享保 12）によれば 526 年（継体天皇 20）とされます。猛覺魔卜仙の入山に始まり、白山小白山両所権現の影向、さらに行善による開基や役小角の入峯などが語られます。その後、中興の祖としての頼厳上人の入山と山王権現の勧請、五百余りの坊を配置し、修験道の移入により千日行、峰入りといった修行の体系化が進み、山の組織化が図られたとされます。その結果、銅板法華経の勧進（1142 年：康治元）が行われ、彦山を中心とした豊前修験道の重要な山としての地位を確立してゆきます。

また、求菩提六峰として飯盛山東光寺、紅梅山松福寺、常在山如法寺、松尾山医王寺、両界山経読堂、宝勝山長福寺が配置され、山の組織が整えられたことがわかります。しかし、中世以降は宇都宮氏との争論や中国地方の大内氏と豊後の大友氏の勢力争いの中、次第に勢力を削られていき、その結果、近世には領主の庇護を受けつつ檀家制度の導入を行うなどして、何とか修験の山としての存続を図ることになります。

明治維新後の神仏判然令・修験宗廃止令を境に多くの修験者が山を下り、修験道の山としての求菩提山は終焉を迎えます。



求菩提山全景



求菩提山上宮

同時開催　求菩提山史跡指定25周年記念パネル展

求菩提山開山伝説1500年記念特別展

縁起と開山　～彦山六峰の山々～

会　　期：2026 年 10 月 24 日～ 11 月 29 日

休 館 日：月曜日（11/23 開館、11/24 休館）

開館時間：9：30 ～ 16：30（入館は 16：00 まで）

発行：求菩提資料館

〒828-0085 福岡県豊前市大字鳥井畑 247

TEL 0979-88-3203

印刷：築上印刷有限会社

2026 年 10 月 24 日